

元富東古墳

—A・B地点の調査—

2016

本庄市教育委員会

序

高崎線本庄駅の南口から駅南通りを真直ぐ南にしばらく行きますと、幅広い歩道を備えた新しい道路と真新しい家並みが並ぶ住宅地や店舗が目に入ります。新幹線本庄早稲田駅を南に見て新しい街並みをあとに、東西に伸びる旧道を西に行きますと、昔ながらののどかな家並みと畑の中に、新しい家が点在する一帯に至ります。元富東古墳は、そうした一角に墳丘の残る古墳です。元富東古墳の周りには、旧道沿いに大きな墳丘の残る2つの古墳が残存しており、元富東古墳は、それらの古墳を含む「東富田古墳群」という古墳群の中の一古墳であることが判っています。

この度元富東古墳の東側の土地に集合住宅を建設する計画が持ち上がりました。事業者と繰り返し協議を重ねましたが、集合住宅に併設する施設を建設するためには、周堀があると予想される場所と墳丘の一部を掘削せざるをえないこととなり、やむなく記録保存の措置を講じることになりました。

本報告書は、そうした記録保存の措置として行った発掘調査の成果です。元富東古墳については、これまで墳丘の残る古墳であること以外何ひとつ分からない古墳でしたが、墳丘の造り方が思いのほか粗略であることや石を積み上げた施設を伴うこと、埴輪を伴う可能性があることなど、古墳の時期や性格を考える上での手がかりを得ることができました。もとよりほんのわずかな範囲の調査ですので大きな成果とは言えませんが、元富東古墳だけでなく、不明な点の多い「東富田古墳群」についても、今後検討すべき資料であろうかと思えます。

この報告書が、埋蔵文化財についての理解と郷土の歴史についての関心を一層深めるための素材として、多くの方々にご活用頂ければ幸いに存じます。

末筆ながら、発掘調査、報告書作成にあたって、多大なご協力を賜った関係諸機関並びに各位に対して、心から御礼申し上げます。

平成 28 年 3 月

本庄市教育委員会
教育長 勝山 勉

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市東富田字元富231番1および234番に所在する元富東古墳A・B地点の調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、日向寿秀氏が計画した集合住宅の建設に先立ち実施した。A地点は、合併浄化槽埋設予定地、B地点は、駐車場、および集合住宅と駐車場を結ぶ通路建設予定地の一部である。発掘調査期間は、平成27年10月13日から同年10月30日までである。
3. 発掘調査は、本庄市教育委員会が行い、現地調査に関しては、松本 完が担当した。
4. 発掘調査から報告書刊行に要した経費は、事業主体者である日向寿秀氏の委託金である。
5. 本書で使用した地図のうち、第1図は、「都市計画図」（平成25年測量、2千5百分の一、本庄市役所作成）の縮小版、第2図は、「都市計画図17」（平成10年測量、同）をもとに作成した。
6. 本書で用いたXY座標値は、世界測地系第IX系による座標値である。
7. 土層および遺物の色調表現は、『新編標準土色帳』を基準とした。
8. 遺物写真の撮影は、磯崎勝人が行った。写真図版中の遺物番号は、挿図中の遺物番号に一致する。
9. 本書で用いた遺跡分布図、全体図、遺構図の作成作業、および編集作業の一部に関しては、的野善行、新井嘉人が行った。
10. 本書の執筆、編集は、Ⅲの出土遺物の記載を太田博之が行い、その他を、松本が執筆し、編集した。
11. 発掘調査及び本書の作成に関しては、下記の方々や諸機関からご助言、ご協力を賜った。ここに記し、感謝する次第である（敬称略）。

荒川正夫 池田匡彦 井上裕一 金子彰男 車崎正彦 昆彭生 坂本和俊 中沢良一 藤根久 丸山修
丸山陽一 矢内勲

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 早稲田大学本庄考古資料館
大和ハウス工業株式会社

12. 発掘調査および整理作業、報告書の刊行にかかる本庄市教育委員会の組織は、以下のとおりである。

発掘調査・報告書刊行組織（平成27年度）

主体者	本庄市教育委員会		
	教育長	勝山	勉
事務局	事務局長	稲田	幸也
	文化財保護課		
	課長	川上	美恵
	課長補佐	太田	博之
	兼埋蔵文化財係長		
	埋蔵文化財係		
	主幹	恋河内	昭彦
担当者	主査	松本	完
	主査	徳山	寿樹
	主事	栗原	秀太
	臨時職員	的野	善行

目次

序

例言

目次

I	調査にいたる経緯	1
II	遺跡の立地と環境	2
1	遺跡の立地	2
2	周辺の遺跡と歴史的環境	2
III	元富東古墳A・B地点の調査	4
1	調査の概要	4
2	A地点の調査	4
1号溝跡		4
1号土坑		8
3	B地点の調査	8
墳丘		8
礫積遺構		11
その他出土遺物		12
IV	まとめ	13
	引用・参考文献	14

図版

挿図目次

第1図	周辺の主要遺跡	第7図	B地点全体図
第2図	発掘調査地点近傍の遺跡	第8図	墳丘等高線図
第3図	試掘調査トレンチ位置図	第9図	墳丘断面図(1)
第4図	元富東古墳現況等高線図	第10図	墳丘断面図(2)
第5図	A地点全体図および断面図	第11図	礫積遺構平面図・断面図・立面図
第6図	1号溝跡出土遺物	第12図	B地点出土遺物

図版目次

図版1	元富古墳全景、A地点完掘状態、1号溝跡、1号土坑	18完掘状態
図版2	B地点墳丘検出状態、全景、トレンチ17・	図版3 トレンチ20墳丘断面、礫積遺構、B地点出土遺物

I 調査にいたる経緯

本庄市は、利根川をはさみ群馬県域と隣接する埼玉県北部の中心都市である。その地理的位置から古来より現在の群馬県域と密接な関係を持ち、交通・交流の結節点として、文物が逸早く流入し、様々な人々の生活の舞台として栄えた地域であった。埋蔵文化財のとりわけ多い地域であることが、それを何よりも雄弁に物語っている。中でも古墳時代の遺跡に関しては、これまで市域で確認された古墳だけでも600基を優に超え、県内でも有数の古墳の集中する地域である。

今回報告する元富東古墳（53-121）を含む「東富田古墳群」のある一帯は、市域北半のほぼ中央、女堀川中流域右岸に広がる田園地帯の一角を占めるが、新幹線本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業地に隣接する位置ゆえに、平成18年以降、その静かな田園風景も少しずつ変貌しつつあるかに見える。

元富東古墳に関しては、南側近傍の西原古墳の発掘調査を機に、周辺の諸古墳とともに簡便な測量図が示されたことが、古墳として知られる端緒であった（増田 1989）。その後公卿塚古墳など近隣の古墳の発掘調査（増田・坂本他 1986、太田・佐藤 1991）などのわずかな調査例や数箇所の試掘調査を除けば、「東富田古墳群」についての考古学的な知見は、ほとんど増えない状態が長く続いた。

平成23年2月、元富東古墳の墳丘の東側隣接地の開発計画が持ち上がり、本教育委員会が試掘調査を実施した。この開発計画は、一旦立ち消えとなったが、平成27年3月には、土地所有者である日向寿秀氏より、墳丘部分全体を整地し、集合住宅を建設する開発計画に沿う照会文書が改めて提出されるに至った。

この開発計画に応じた試掘調査は、平成27年3・4月に本教育委員会が実施した。試掘調査の結果を踏まえ、本教育委員会と事業主体者である日向寿秀氏、開発業者の3者で協議を重ねた末、墳丘部分全体を整地し、開発する計画は回避されることとなり、墳丘の東側にある土地に集合住宅を建設し、墳丘南側の畑地に駐車場を建設する形での開発計画の変更がなされることとなった。新たな計画での集合住宅の本体建設予定地は、上記した試掘調査により、攪乱が予定地のほぼ全体に及ぶことが判明していた。

主に南側の墳丘および周堀の残存状態を確かめるべく、平成27年7月に、本教育委員会が試掘調査を実施した。試掘調査から発掘調査にいたる過程には、建築担当者の勇み足から、照会文書を提出することなく、集合住宅の本体建設予定地に柱状改良を行うという遺憾な事態も発生している。

4次に及ぶ試掘調査の所見にもとづき、合併浄化槽の埋設予定箇所および墳丘南側の駐車場と集合住宅をつなぐ通路の敷設予定地に関しては、前者（A地点）は、推定される古墳周堀の一部と重なり、後者（B地点）の場合、墳丘の一部に掘削が及ぶ整地が必要となることから、やむを得ず事前に発掘調査を行い、記録保存の措置を講じることとなった。

（本庄市教育委員会事務局）

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

元富東古墳は、本庄市域北半のほぼ中央に位置する。上越新幹線本庄早稲田駅の北西方向に450mほど離れた位置にある。市域中央の男堀川と女堀川に挟まれた東西に長い低位段丘の西寄りのほぼ中央に立地する。

本庄市の地形は、利根川右岸の低地、沖積地からなる北東部、市街地化の中心をなす台地、低位段丘、残丘の織りなす中央部、丘陵、山地の広がる南西部の3つに大きく分けることができる。低地は、利根川や烏川の氾濫原で、下流に広がる妻沼低地、加須低地へと連なる。台地は、いわゆる北武蔵台地最北の本庄台地であり、主に神流川扇状地と身馴川扇状地の複合扇状地性の台地である。身馴川扇状地は、北西側を児玉丘陵、生野山丘陵、浅見山丘陵に、南東側を松久丘陵、櫛引台地にはさまれた一帯である。この女堀川、身馴川（小山川）などの諸河川に刻まれた低位段丘、台地を主とする中央部の一帯が、市域でも最も遺跡が濃密に分布する範囲である。山地は、上武山地に属する陣見山、不動山などの山並である。

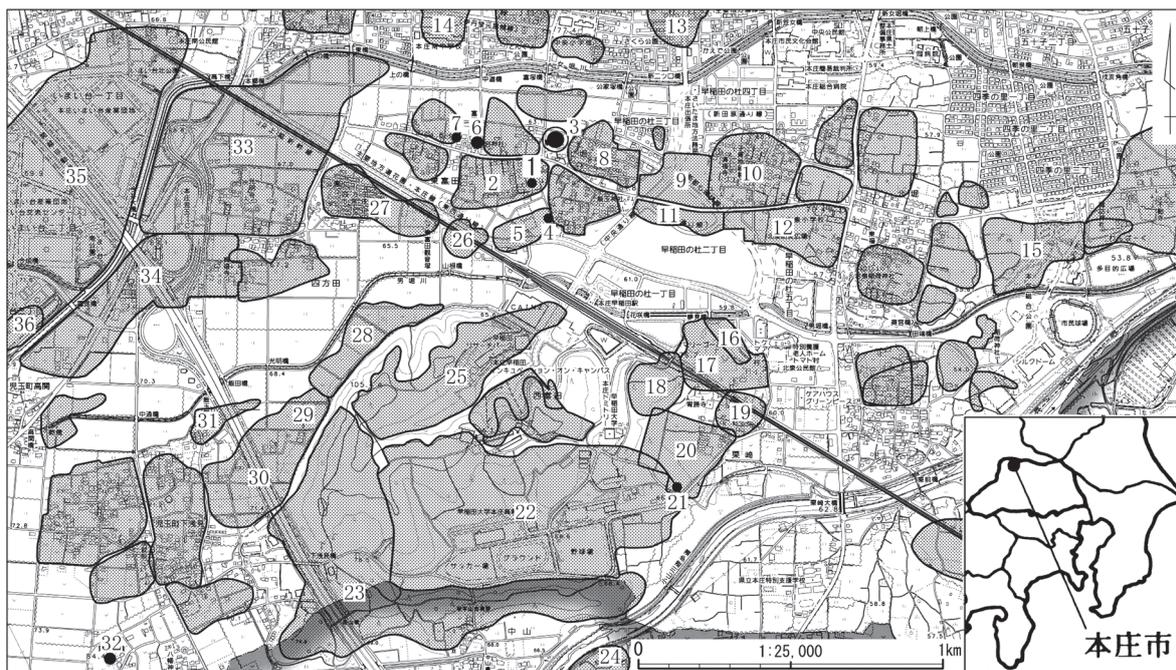
2 周辺の遺跡と歴史的環境

元富東古墳の周辺の古墳時代の遺跡、主に古墳群、古墳に限って、簡単に触れることにしたい（第1・2図）。

元富東古墳の周辺には、古墳時代前期以降多数の集落跡が見られ、また、それら集落との関係で、時に連れ場所を変えて、複数の墓域が形成された模様である。

まず、元富東古墳の北東100m余には、古墳時代中期前葉とも目される墳丘径60m前後の短い造り出しの付いた円墳とされる公卿塚古墳（3）があり、南東100mほど離れた位置には、石室の調査がなされた西原古墳（4）がある。西原古墳は、石室の形態から「7世紀前半に所属する」（増田1989）とされ、「東富田古墳群」が時期的に複雑な様相をもつことを示している。公卿塚古墳、元富東古墳、西原古墳の3つの古墳が東縁を形作る「東富田古墳群」は、他に墳丘の残存する古墳として規模の大きな元富古墳（東富田稻荷山古墳）、熊野十二社神社古墳を擁する。また、現存古墳から想定される古墳群の推定範囲内では、試掘調査により、周堀のみ留める古墳が相当数地下に眠っており、住居跡が見られない可能性が高いことが判明している。東西400m、南北300mほどの範囲に、かなりの数の古墳が集中して築かれた墓域、古墳群と見てよいであろう。

目をやや転じるなら、元富東古墳の東1kmほどの同じ微高地上には、古墳時代前期の方形周溝墓、前方後方墳2基が検出された北堀新田前遺跡（12）がある。さらに沖積地を隔てた南側の浅見山丘陵上には、古墳時代前期末葉の前方後円墳、方墳である前山1・2号墳（18）や、古墳時代前期の方形周溝墓が確認されている宥勝寺北裏遺跡（17）がある。元富東古墳の南500mほど離れた北東に細長くのびた支丘先端の南斜面には、古墳時代前期後半～末葉の12基の方形周溝墓からなる墓域の調査がなされた浅見山I遺跡（25）がある。浅見山（大久保山）の谷を隔てた南側、東西に伸びる支丘上には、塚本山古墳群（23）がある。



1. 元富東古墳 2. 元富 3. 公卿塚古墳 4. 西原古墳 5. 七色塚 6. 熊野十二社神社古墳 7. 元富古墳 8. 北堀久下塚北 9. 久下東 10. 北堀新田 11. 久下前 12. 北堀新田前 13. 笠ヶ谷戸 14. 雌濠 15. 西五十子古墳群 16. 宥勝寺裏埴輪窯跡 17. 宥勝寺北裏 18. 前山古墳群 19. 東谷 20. 大久保山寺院跡 21. 東谷古墳 22. 大久保山 23. 塚本山古墳群 24. 村後 25. 浅見山 I 26. 下田 27. 観音塚 28. 山根 29. 根田 30. 雷電下 31. 飯玉東 32. 鷲山 33. 西富田・四方田条里、四方田、九反田 34. 後張・川越田 35. 今井条里 36. 今井川越田

第1図 周辺の主要遺跡



第2図 発掘調査地点近傍の遺跡

Ⅲ 元富東古墳 A・B 地点の調査

1 調査の概要

元富東古墳は、「東富田古墳群」に属し、公卿塚古墳、西原古墳とともに同古墳群の東縁をなす一古墳である。これまで古墳の略測図や写真（増田 1989）以外何ら記録のない古墳であり、今回の発掘調査および試掘調査（第3図：トレンチ1～16。同図では、「トレンチ」を「Tr」と略記。）によって得られた成果が、現段階で同古墳について知ることのできる考古学的な情報のすべてである。

4次にわたる試掘調査によって、元富東古墳の南側の周堀を確認しているが、後述するように東側に関しては、周堀が後述する1号溝跡に壊されている可能性が考えられ、周堀は確認できていない。なお、第4図では、東側のトレンチ3・7に関して、試掘調査時に確認できた遺構を図示している。また、墳丘に開掘した試掘トレンチでは、掘削深度が浅く、埋葬施設を確認することができなかった。

第3～5図には、元富東古墳の現況での等高線図を示した。任意の基準点から比高差を求めた多数の計測点から机上で作成した比高差25cm間隔の等高線図を、実際の標高値の判る計測点を用いて補正した図であり、墳丘の現状でのおおよその形状を考える手がかりとして用いることはできるであろう。第4図の等高線図から読み取ることのできる、現状の墳丘の特徴は、以下の通りである。

まず、等高線図からは、現状の墳丘が改変を受けた結果であることが判る。墳丘の東側は、削り落されたかのような崖面状をなしている。墳丘の南側から南西側にかけては、なだらかな傾斜をなし裾が大きく広がり、墳丘の北西側が直線的なものも本来の墳丘の名残りというよりは、墳丘が削られた改変の痕と見た方がよさそうである。また、墳丘に防空壕を設けたり、芋穴を掘ったことがあるという土地所有者の証言や現在よりさらに多くの樹木が繁茂する昭和60年代に撮影された本古墳の写真（図版1：上段、増田 1989より転載）なども、現状の墳丘が様々な改変を経た後の姿であることを示している。現況での墳丘の形状や等高線図から、墳形を推定することは難しいと言わざるを得ない。

今回の発掘調査は、集合住宅の合併浄化槽埋設予定地（A地点）と駐車場の一部および仮舗装の通路の敷設予定地（B地点）の2箇所において実施した。A地点では、設定した長方形の調査範囲を開掘、精査し、B地点では、表土層を除去し墳丘面を露出させて、簡易な測量を行い、しかる後推定墳丘中心点から放射状に伸ばした直線に沿って設定した3本のトレンチ（第7図：Tr. 17～19）および東西方向のトレンチ（同図：Tr. 20）を開掘し、墳丘を切断して土層断面を観察、記録した。A地点では、溝跡1条、土坑1基を検出し、B地点では、墳丘の一部を調査するとともに、本古墳に関連する可能性のある礫を積み上げた遺構を検出した。A・B地点を合わせた発掘調査面積は、93 m²である。

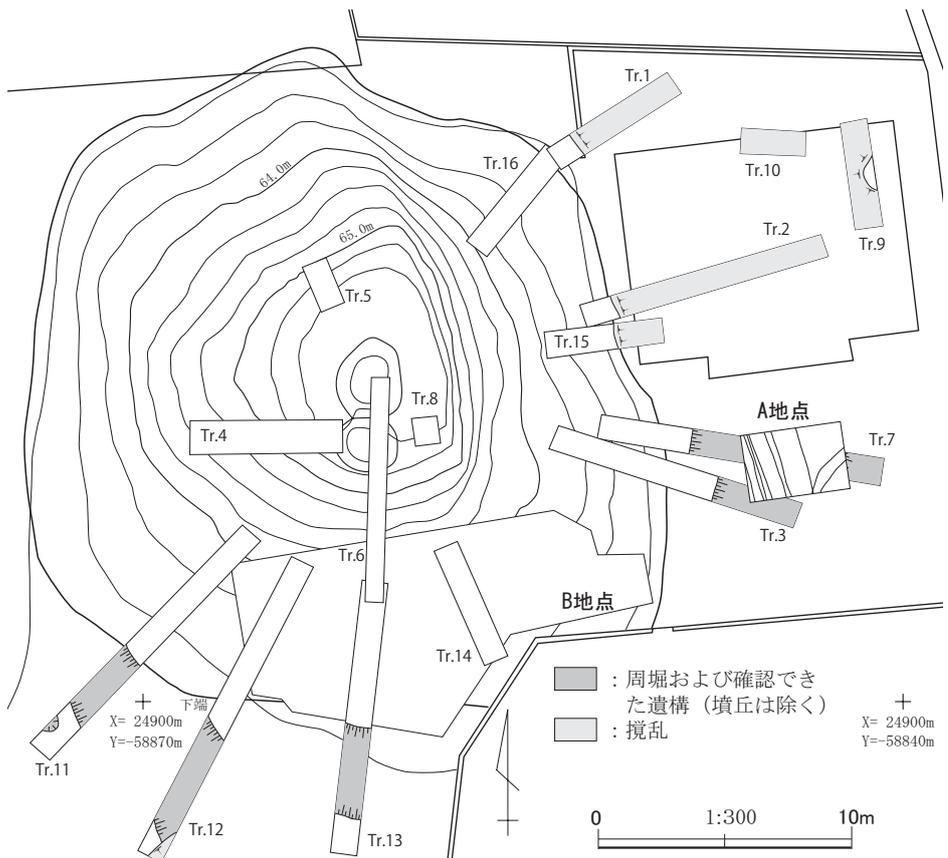
2 A地点の調査

1号溝跡

遺構（第5図、図版1）

調査範囲の西半を占め、南北に走る溝跡である。確認面は、黄褐色のハードローム層上面であるが、覆土より上位の層にも本遺構を覆うように、「旧表土」の黒褐色土がかなり含まれる。西側の上端は、調査範囲外である。土層断面では、1号土坑より後出する遺構と考えられる。

東側の溝壁上端は、直線的であり、弧を描く気配は全く見られない。これは、中段の稜、溝底端や、西側の溝壁中段の稜、溝底端も同様で、いずれも直線的である。調査範囲内で確認できた長さは270cm、調査範囲内での溝幅は、250cmである。走向は、N-15°-W前後である。断面形は、下半は箱薬研に近いが、上半は大きく開く形態であり、西側の溝壁には、2段の明瞭な段がある。段上は傾斜が



第3図 試掘調査トレンチ位置図

緩やかで、平場状をなす。東側の溝壁下半にも段があるが、西側の溝壁ほど明瞭ではない。段は、溝が掘り直された痕跡と考えることもできる。溝底面は、ほぼ平坦であり、溝底幅は、55~61cmである。深さは、102~107cmである。覆土は、8~20層の13層に分けられた。古墳周堀にしばしば見られる、「旧表土」の黒褐色土が含まれるのは、最上層の8・9層に限られ、以下の土層は、灰褐色の粘質土やロームの溝壁の崩落土である。灰褐色の粘質土は、雨水や流水が関係して、溝が埋没したことを物語っている。

覆土に関しては、古墳周堀とは考え難く、古墳時代以降の水路などの溝跡覆土に類似する。

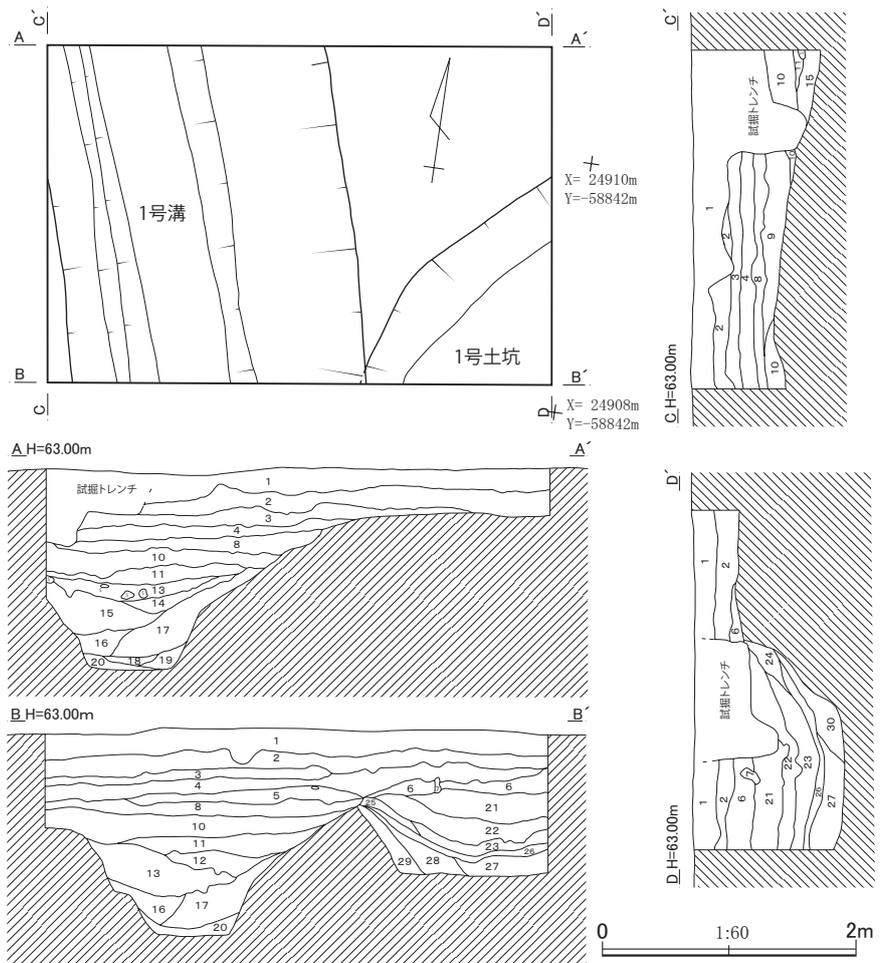
以上より、位置的には、古墳周堀と見て問題ないが、掘り直されたような段を有する溝壁の形態、覆土の性状から見て、



第4図 元富東古墳現況等高線図

A地点土層注記（1）

- 1層：暗褐色土～灰黄褐色土層。現表土層。敷き砂利や試掘トレンチの埋め戻し土を含む。本来の土壌部分は、As-Aを多量に含み、粒子粗くシャリシャリしている。乾燥すると灰色み帯び灰黄褐色となる。
- 2層：暗褐色土層。現代以前、近世の表土を含む表土層。1層に近いが、ローム粒が多く、やや色調が明るい。As-Aをかなり含む。
- 3層：暗褐色土層。2層土に近いが、「旧表土」の黒褐色土（「クロボク土」の一種）およびシルト化した灰黄褐色土をモヤモヤ斑状に含む。
- 4層：暗褐色土層。3層に近いが、若干黒褐色土が少なく、ローム粒を含む。
- 5層：暗褐色土層。4層に近いが、黒褐色土が多い。
- 6層：黒褐色土層。黒褐色土(10YR2/3)あるいは黒みの強い暗褐色土(10YR3/3)、つまり、いわゆる「旧表土」を主に、ローム粒を不規則に含む。モヤモヤ4層土の母材の暗褐色土が混じる。
- 7層：暗褐色土層。4層土の大ブロック。
- 8層：暗褐色土層。4層に近いが、さらにロームが多い。黒褐色土はさらに減じ、モヤモヤ雲状に混入する。8～20層は、1号溝覆土。
- 9層：暗褐色土層。4層に近いが、黒褐色土が少ない。
- 10層：灰褐色土層。暗褐色土と灰褐色土の斑状の混合土。ローム粒を斑点状に含む。8・9層に比し、急激にシルト化が進み、粘性が増し、よりしまる。この層以下灰色みを帯びる。
- 11層：灰褐色土層。10層に近いが、さらにシルト化が進み、鉄分がモヤモヤ沈着し始める。
- 12層：灰褐色土層。11層土と白みの強いローム粒、10～50mm大のロームブロックの不規則な斑状の混合土。
- 13層：灰褐色～褐灰色土層。11層に近いが、さらにシルト化が進み、黒みが増す。鉄分、マンガンが沈着する。上位の層よりしまりが増す。
- 14層：灰褐色土層。13層に近いが、ロームが多い。13層よりしまり弱い。
- 15層：灰褐色土層。灰褐色シルト質土を主に、細砂を含みシャリシャリしている。マンガンがモヤモヤ沈着する。粘性は、上位層に比しさらに増すが、しまっておらず、軟らか。
- 16層：灰褐色土層。15層に近いが、マンガンがさらに多くなり、赤茶っぽくなる。粘性が強い。



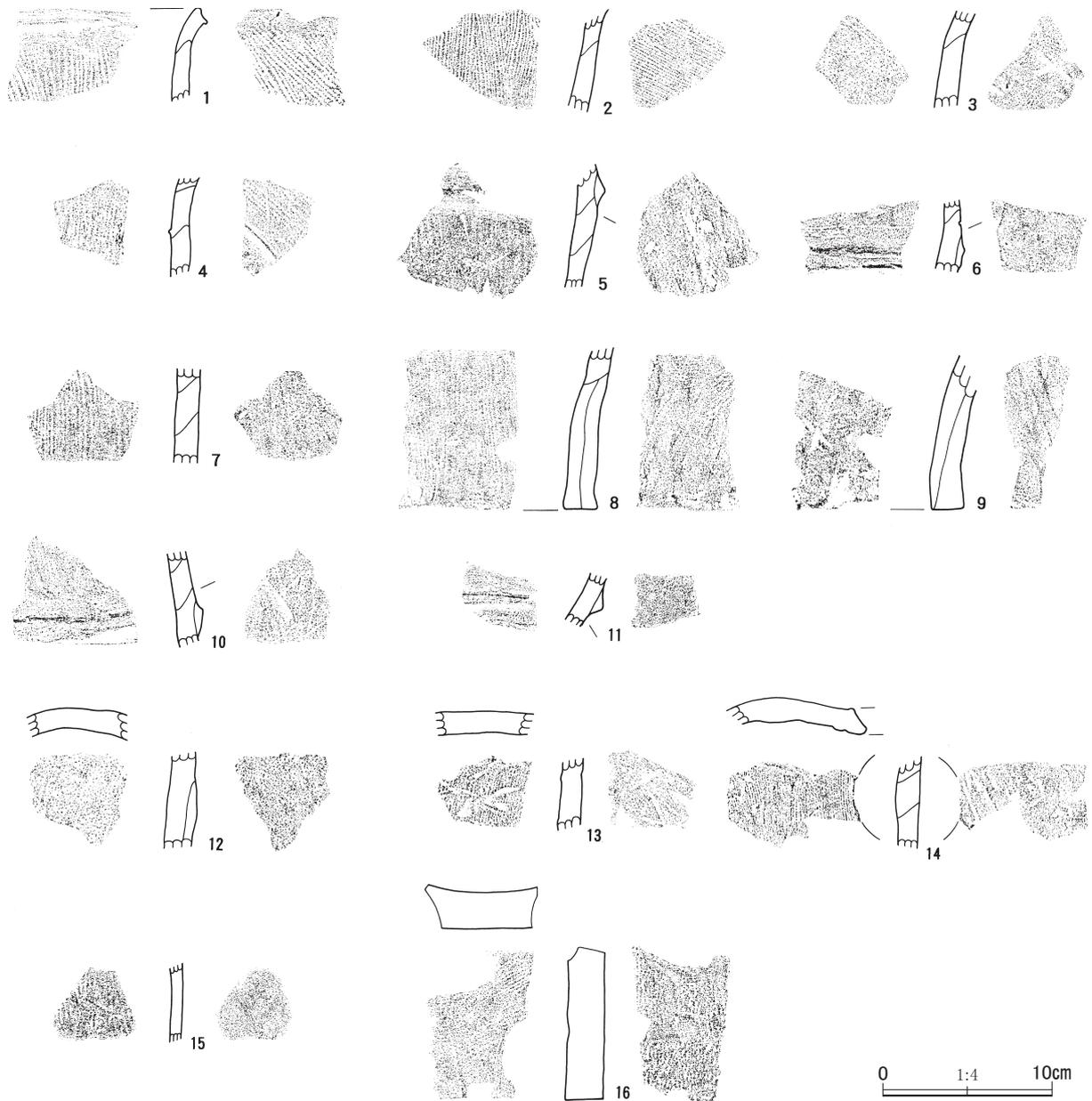
- 17層：黄褐色土層。溝壁のロームの崩落土。マンガンがモヤモヤ沈着する。比較的軟らか。以下の層を含め、粘性が強い。
- 18層：灰褐色土層。16層に近いが、黒みが強い。
- 19層：黄褐色土層。17層に近いが、マンガン少なく、白みが強い。
- 20層：灰褐色土層。16層に近いが、マンガンがやや少なく、白みが強い。
- 21層：黒褐色土層。6層に近いが、ロームが多い。21～30層は、1号土坑覆土。
- 22層：黒褐色土層。6層に近いが、ロームがやや少ない。
- 23層：黒褐色土層。黒褐色土と暗褐色土、ロームのモヤモヤとした斑状の混合土。
- 24層：黄褐色土層。黒褐色土とロームの混合土。
- 25層：黒褐色土層。23層に近いが、ロームが少ない。
- 26層：灰黄褐色粘土層（10YR6/2）。灰黄褐色粘土の貼底、貼壁層。硬い貼床のように著しく硬化している（断面では、全体が均一ではなく、所々粘土は雲状をなし途切れる）。
- 27層：黒褐色土層。黒褐色土と暗褐色土、ロームの斑状の混合土。所々ラミナをなす。23層よりロームが多い。
- 28層：褐色土層。27層に近いが、ロームが多い。
- 29層：黒褐色土層。28層に近いが、黒褐色土が多い。
- 30層：黄褐色土層。27・29層に近いが、ロームが多い。所々ラミナをなす。

第5図 A地点全体図および断面図

古墳周堀とするのは、むつかしいと考える。時期的にも、古墳時代以降の遺構である可能性があるように思われる。

遺物（第6図）

第6図1～5は、本遺構の下層以下から出土した。第6図9・10・15・16は、1号溝跡の覆土中から出土した資料ではないが、ここに掲載した。1～9は円筒埴輪で、いずれも二条突帯三段構成である。1～3は最上段の破片で、3にはヘラ描きによる刻線が観察される。8・9は基部の破片である。幅の広い粘土板を表裏に合わせて基部成形を行っている。内外面とも、底部調整は観察されない。10・11は朝顔形埴輪で、10は肩部、11は口縁部の破片である。12～14は形象埴輪の一部である。14には円形透孔が見られ、器壁が薄く、横断面が楕円形を呈する。埴輪は全体に胎土・焼成とも良好で、色調は橙褐色ないし灰褐色を呈する。15は須恵器小型甕の破片である。外面に平行タタキが残る。暗灰色を呈する。16は中世の平瓦で、凸面にタタキ目が残る。還元焼成により灰色を呈する。



第6図 1号溝跡出土遺物

1号土坑（第5図、図版1）

遺構（第5図、図版1）

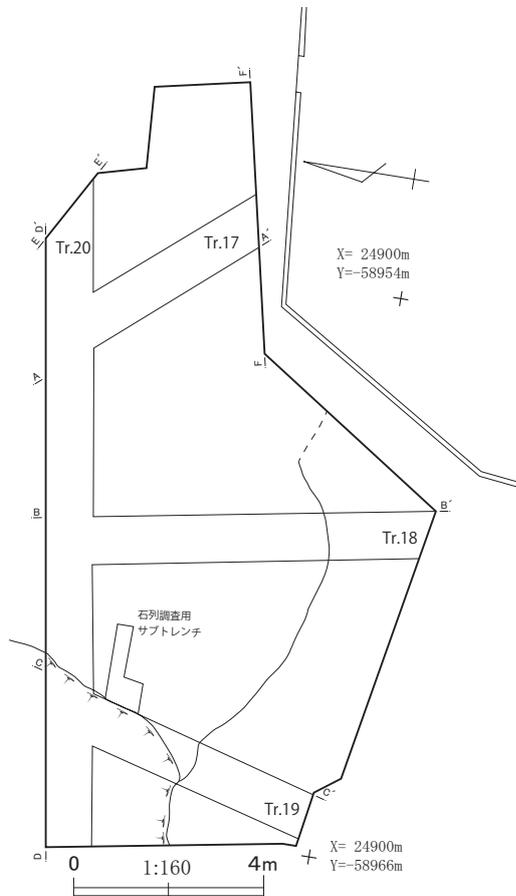
調査範囲南東縁を横切る形で検出した遺構である。全体的に壁や底面が丸みをもつことから土坑の一種と推定した。土層断面によれば、1号溝跡に先行する遺構と考えられる。

平面形は、円形あるいは楕円形に近い形態と考えられる。いずれも現存長になるが、南北方向での長さは、117cm、東西方向での長さは、152cm、最深部での深さは、73cmである。ロームを掘り込んで造られており、ロームを底面として使用された後に、再度もとの底面から11～20cmくらいの高さに、灰黄褐色の粘土(第5図：「26層」)を敷きつめ、硬く突き固めて使用している。貼床に類似する粘土層は、厚さ2～8cm、坑壁の一部にまで及んでいる。覆土は、いわゆる「旧表土」の黒褐色土を主とする。出土遺物は皆無に等しいが、覆土から見て、古墳時代の遺構と思われる。

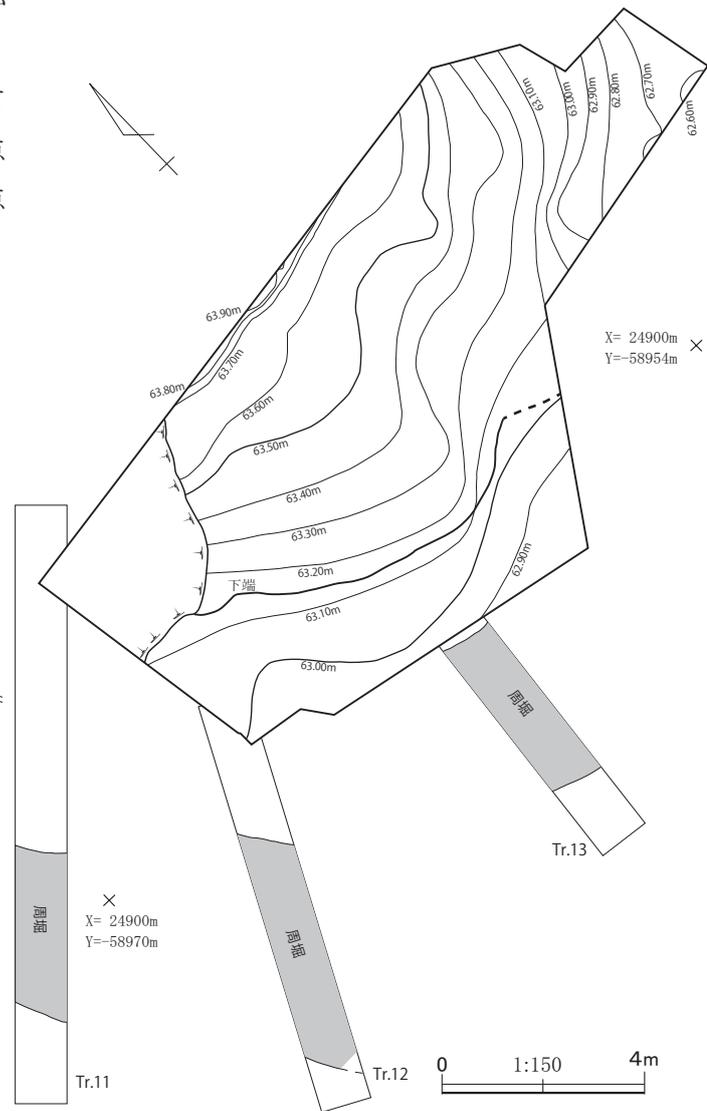
3 B地点の調査

墳丘（第4・8～10図、図版2・3）

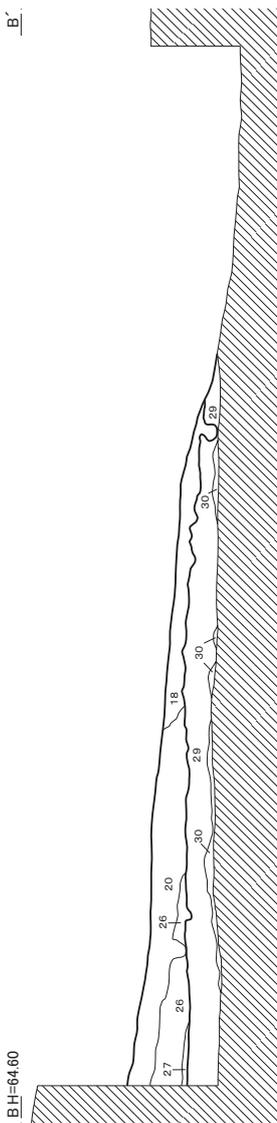
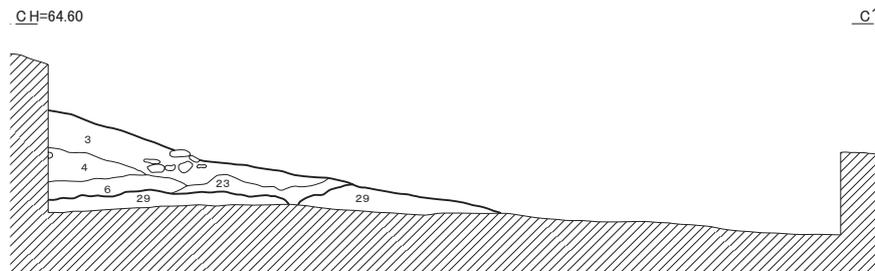
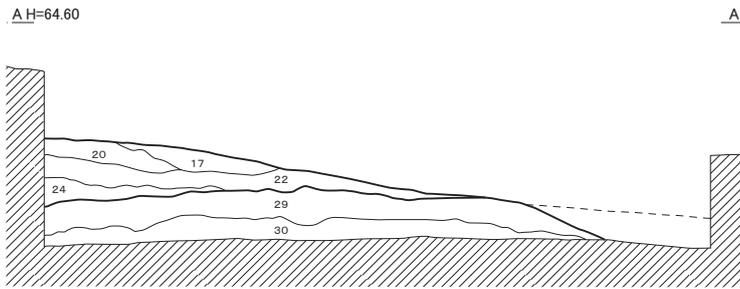
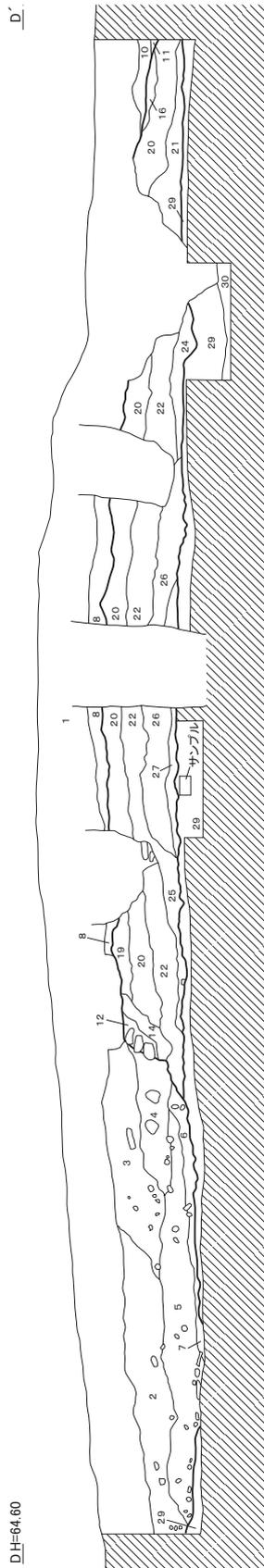
今回調査した部分は、南側の墳丘斜面から墳裾に当たる部分である。地形的には、西半はほぼ平坦で、東半は東側に向かって傾斜し、やや低くなるようである。B地点の中央南端の地山のローム層上面とA地点



第7図 B地点全体図



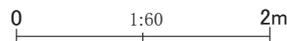
第8図 墳丘等高線図



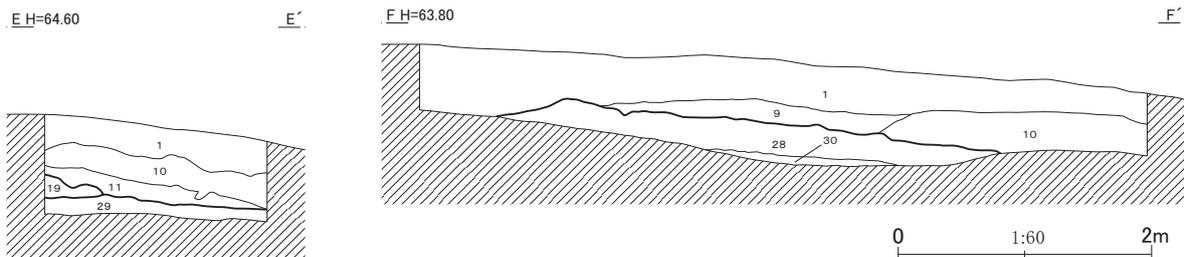
B地点

墳丘土層注記(1)

- 1層：暗褐色土～灰黄褐色土層。現表土層および近世の表土層、試掘トレンチ埋め土、攪乱などを含む表土層。本来の土壤部分は、As-Aを多量に含み、粒子粗くシャリシャリしている。乾燥すると灰色みを帯び灰黄褐色となる。
- 2層：暗褐色土層。暗褐色土と黒褐色土のモヤモヤ斑状の混合土。黒みはかなり強い。2～7層は、ある時点での墳丘破壊に伴う流出土で、10～60mm大、100～200mm大前後を主とする角礫、円礫、長楕円礫を多く含む。粘性、しまりが弱く、墳丘盛土とは明瞭に区別できる。
- 3層：暗褐色土層。2層に近いが、ロームが多く、より色調が明るい。
- 4層：暗褐色土層。3層に近いが、さらにロームが多く、色調も明るい。
- 5層：褐色土層。暗褐色土とローム粒、5～50mm大のロームブロックの不規則な斑状の混合土。
- 6層：暗褐色土層。4層に近いが、やや黒褐色土が多い。小礫は少ない。
- 7層：黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土をモヤモヤ斑状に含む。
- 8層：暗褐色土層。暗褐色土と黒褐色土の混合土。ローム粒、ローム小ブロックを含む。表土に比し、黒みがかかなり強く、明瞭に識別できるが、しまりがほとんどないため、墳丘盛土とも区別される。墳丘盛土がそのまま腐蝕され、あるいは風化して、膨軟化したものと考えられる。
- 9層：暗褐色土層。暗褐色土と黒褐色土の混合土を主に、ローム粒をかなり含む。サラサラしており、しまりが弱い。



第9図 墳丘断面図(1)



填丘土層注記(2)

- 10層：暗褐色土層。8層に近い(母材、含有物、色調など)が、さらにしまりがなく、粒子細かくサラサラしている。填丘盛土の流出土。
- 11層：暗褐色土層。10層に近いが、ローム粒、5～15mm大のロームブロックが多い。粒子細かくサラサラしている。10層同様の填丘盛土の流出土。
- 12層：暗褐色土層。明るい色調の暗褐色土を主に、ローム粒、ローム小ブロックを含む。しまりがなく、軟らか。12～15層は、石列に関連する覆土。
- 13層：褐色土層。12層に近いが、ロームが多い。
- 14層：褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、ローム粒、5～30mm大のロームブロックのモヤモヤ斑状の混合土。ロームブロックは所々まとまり水玉状に点在する。ややしまっている。
- 15層：暗褐色土層。13層土を主に、ローム粒、5～50mm大のロームブロックを多量に含む。
- 16層：暗褐色土層。11層に近いが、しまっている。腐蝕、風化していない、本来の「11層土」か。16～27層は、填丘の盛土層。
- 17層：暗褐色土層。暗褐色土と同量のローム粒の混合土。5～20mm大のロームブロックをかなりの量含む。ややしまる。
- 18層：暗褐色土層。黒みの強い暗褐色土(2層土と黒褐色土の混合土)を主に、ローム粒、5～150mm大のロームブロックを多量に含む。この層以下しまりが増し、やや粘性が見られるようになるが、通常の填丘盛土に比べ、しまりは弱い。
- 19層：暗褐色土層。8層に近いが、しまっている。腐蝕、風化していない、本来の「8層土」か。
- 20層：暗褐色土層。暗褐色土と黒褐色土の斑状の混合土。ローム粒をかなり含み、5～30mm大のロームブロックを少量含む。ややしまっている。
- 21層：暗褐色土層。20層に近いが、ロームが多い。
- 22層：黒褐色土層。20層に近いが、明瞭に黒みが強く(黒褐色土が多く)、よりしまっている。粘性がややある。
- 23層：暗褐色土層。6層に近いが、5～20mm大のロームブロックが多い。しまっている。
- 24層：黒褐色土層。モヤモヤと暗褐色土を含み、ローム粒、5～20mm大のロームブロックをかなり含む。22層より粘性、しまりが強い。
- 25層：黄褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを主に、隙間に暗褐色土、黒褐色土を含む。
- 26層：黄褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを主に、所々暗褐色土、黒褐色土を含む。見た目は、ほとんどローム。25層より黒褐色土が少ない。
- 27層：黄褐色土層。26層に近いが、隙間に暗褐色土、黒褐色土が混入し、所々ラミナをなす。26層より暗褐色土、黒褐色土がやや多い。
- 28層：黒褐色土層。いわゆる「旧表土」の黒褐色土に類似するが、しまりが弱く、粘性も乏しい。
- 29層：黒褐色土層。層厚20～30cmのいわゆる「旧表土」の黒褐色土(クロボク土の一種)。粘性が強く、擦り付けると黒炭のよう。
- 30層：褐色土層。黒褐色土とロームの移行層。上下界面は、波状の不整合をなし、所々黒褐色土がモヤモヤ入る。層厚15～25cmの本層下にYPの混じるハードローム層が堆積している。

第10図 填丘断面図(2)

の地山のローム層上面では、30cmほどの比高差がある。

篠竹が繁茂する現表土下に、さらに風雨などにより風化、膨軟化した層がかなりの厚さで堆積しており、填丘の残存状態は良好ではない。調査範囲の填丘西側部分は、大きく崩され、失われている。また、填丘は、かなり凸凹しており、座布団状の低平な形状である。最も高い中央での填丘の高さは、65cmである。填裾はなだらかな傾斜をなし、そのままローム面ないしは「旧表土」の黒褐色土に連なる。調査範囲の東半では、填丘は狭い範囲にとどまるが、「旧表土」の黒褐色土が調査範囲内の端まで分布しており、本来は、填丘が調査範囲内一杯まで広がっていたと推定した。平面形を推定する手掛かりは乏しいが、填裾が丸みをもった形態をなしていることは間違いないようであり、一応円墳の

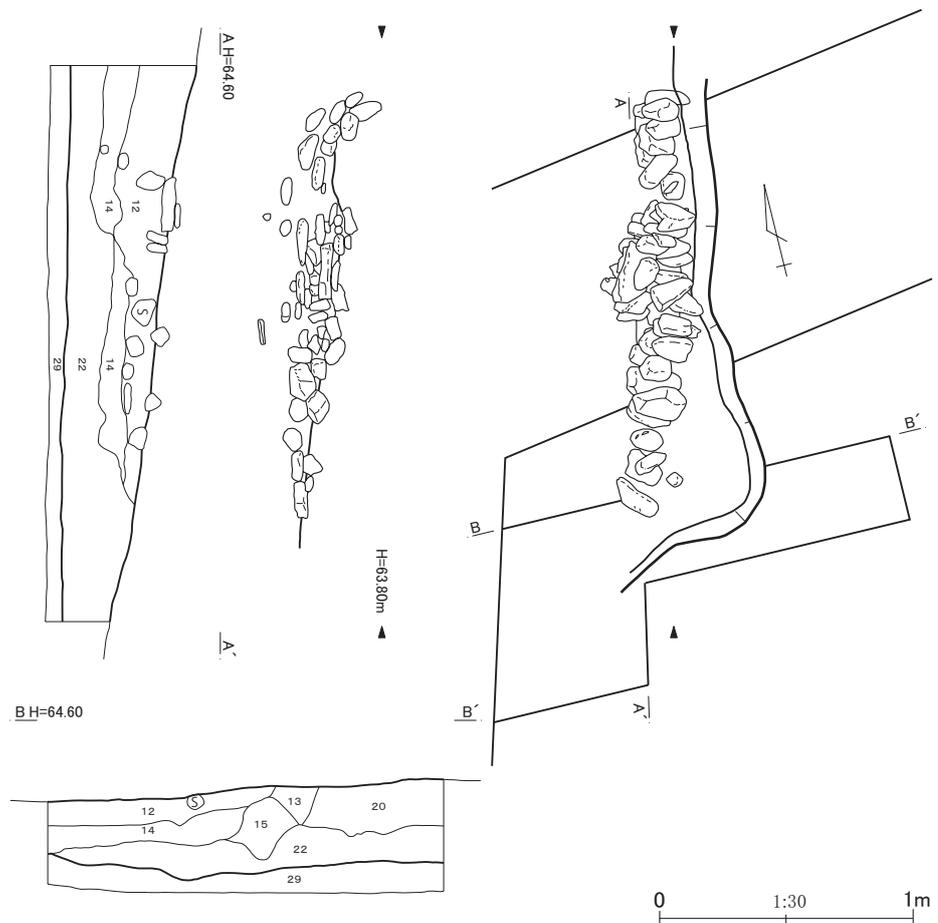
一種の可能性があるとしたい。墳丘構築土は、主に暗褐色土や「旧表土」の黒褐色土とロームの混合土からなる。黒褐色土とロームを交互に突き固めるような構築法は見られず、全体にしまりが弱いことが顕著な特徴である。「旧表土」の黒褐色土層（第9・10図：29層）上面を、まず大まかに整地して、中央に純層に近いロームを盛り（同図：26・27層）、墳丘構築の初発を画し、以降墳丘をとくに強固に築き上げる工法をとらず、全体に層をなすような大まかな階梯を踏んで、漸次土を盛り上げて墳丘を構築している。墳丘の残存状態が悪いのも、ひとつには、この構築法と関係するようである。

礫積遺構（第11図、図版3）

墳丘の西側斜面で検出した遺構である。墳丘面を検出した際に、本遺構周辺で礫が集中して出土したため、精査し、浮いている礫を取り除き、積み上げられたと思われる礫を残すことで検出することができた。礫が「組まれている」とまでは言い切れないと考え、暫定的に「礫積遺構」の呼称を与えた。片岩や頁岩などの河原石を大まかに小口をそろえて列状に並べ、積み上げた遺構の一部と考えられる。礫は、長さが15～20cmの楕円礫を主とするが、10cm以下の礫片、長さ25cm、厚さ5cmほどの大型の板状の片岩片なども含まれ、やや雑多である。多くの礫は、礫同士密接、密着するが、土の詰まった間隙を有する部分もあり、ことごとくの礫が組まれているようには見えない。南北方向での礫の並びの長さは、169cm、ほぼ中心と思われる軸の方位は、N-17°-Eである。なお、本遺構に接する西側で、墳丘が削られ、流出した土（第11図：2～7層）の中に含まれる礫の多くは、本来本遺構を構成した礫と思われる。

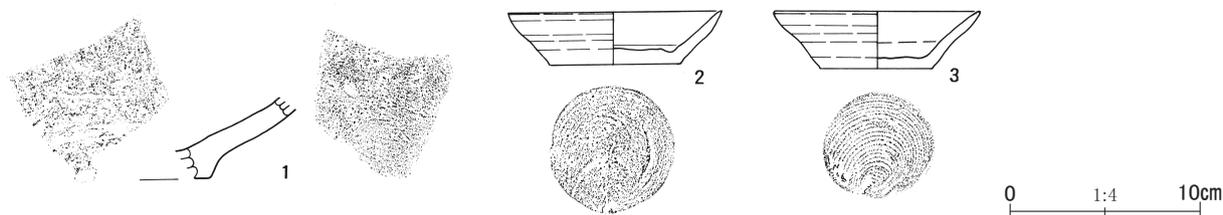
礫積より一回り大きな掘り方、あるいは作業面を確保し、底面を埋め（第14・15層）、礫を積み重ね、裏込めをし（同：13・14層）、造りあげられている。南北方向での掘り方、あるいは作業面の長さは、190cm、下面は、直接墳丘下面と一致する部分と間層を挟む部分が見られる。

極わずかな部分が残存するのみであり、本遺構の性格を特定することはむづかしい。石室などの埋葬施設の一端と考えるのが一法で



第11図 礫積遺構平面図・断面図・立面図

あろうが、礫がかなり雑多で、片岩片などが混ざること、裏込めが粗略であることなど、否定的な材料も見られる。ただし、裏込めの土は、墳丘の構築土と大きく異ならず、墳丘と時期的に大きな隔たりのあるようには思えない。あるいは、単独で設けられた「礫槨墓」などの一部である可能性もあるのかもしれない。墳丘に直接伴うか、伴わないかは結論できないが、古墳時代の遺構と考えてよいと思う。



第12図 B地点出土遺物

その他の出土遺物（第12図、図版3）

第12図1の土師器は、調査範囲内の墳丘西端から出土した。残存する墳丘とほぼ同じ高さから出土したが、この部分は墳丘が壊されており、墳丘を壊した土がそのまま堆積しており（第9図：2～7層）、その廃土中から出土したことになる。2・3は、トレンチ20のほぼ中央で、トレンチの掘削とともに掘り下げた土坑の底面近くから重なった状態で出土した。土坑の平面形はやや不整な円形で、墳丘盛土上の腐植土層中から円柱状に掘り込まれていた。近世の墓穴であろう。

1はやや大型の甕もしくは長胴の壺と推測される個体で、底部外縁から胴下部にかけての破片である。外面が鈍い褐灰色、内面は黒色を呈する。2・3はほぼ完形のかわらけである。体部はロクロ成形で、底部は回転糸切り後無調整である。橙褐色を呈する。

IV まとめ

今回報告する元富東古墳を含む「東富田古墳群」に関して現状で判ることをまとめるなら、以下のようになる。

まず、古墳群は、女堀川と男堀川とそれら両河川の形成した氾濫原、低地に挟まれた東西に長い低位段丘の西半部分に位置する。墳丘が残存し現状で確認できる古墳およびかつて墳丘が視認できた古墳は、元富古墳（東富田稲荷山古墳）、熊野十二社神社古墳、公卿塚古墳（増田・坂本 1986、太田・佐藤 1991他）、元富東古墳、西原古墳（増田 1989）の5基である（第2図）。現状で墳形の判明している古墳は、墳丘径60m前後の造り出し付の円墳とされる公卿塚古墳のみであり、他の古墳は墳形が未確定ではあるが、元富古墳が「直径30m」（増田 1989）、熊野十二社神社古墳が「東西25m、南北42m」（同）、元富東古墳が「東西30m、南北45m、……。復元では直径約42mの大型古墳」（同）とされ、いずれも比較的規模の大きな古墳であったと推定されている。

西端の元富古墳から東端の公卿塚古墳までが300mほど、最も北にある公卿塚古墳から南の西原古墳までが250mほどあり、これを現状で推定できる古墳群のおおよその広がりと考えることができる。ただし、旧地形の復元案から、公卿塚古墳の東側から元富東古墳と西原古墳の間を南西へと抜ける旧河道（「蛭川河川跡」、後の「久保田堀」）を想定し、西原古墳は「東富田古墳群」に含めるべきではないとする考えもある（増田 1989）。なお、この一帯での試掘調査の所見をも勘案するなら、上記したおおよその古墳群の範囲内では、5基の古墳以外に数基の比較的規模の小さい円墳の周堀と思われる遺構が確認されており、住居跡などの古墳時代の生活域の痕跡は今のところ一切見られない。

今回の元富東古墳の発掘調査は、もとよりわずかな範囲の調査であり、得られた知見はわずかである。まず、A地点について、1号溝跡に関しては、本文で記したように、掘り直しとも考えられる段を有する溝壁の形態、覆土の性状から見て、元富東古墳の周堀とするのは難しいと考える。あるいは、推定されているところの「蛭川河川跡」に関連する用排水路の可能性なども考慮してよいのかもしれない。ただし、覆土中から出土した遺物の大半は埴輪片であり、墳丘に近接するA地点の位置を考慮するなら、元富東古墳が埴輪を伴う古墳である可能性は残ると思われる。

A地点の1号土坑に関しては、一旦ある程度埋まった段階に灰黄褐色の粘土層を貼床のように突き固め敷きつめており、水溜めのような用途が考えられる。旧表土の黒褐色土を主とする覆土から見て、古墳時代の遺構とも考えられるが、元富東古墳と関連するかどうかは不明である。

B地点で得られた墳丘に関する所見では、墳丘盛土はかなり軟弱であり、版築に類する盛土の脆弱さを防ぐ工法は一切取られていないことが特徴的である。墳丘を被覆する表土層が思いのほか厚いことも、このことに起因するのであろう。また、現状での墳丘が裾広がりとなっているのは、後世の改変に由るばかりではなく、墳丘盛土の軟弱さにも一因があると思われる。そうしたいわば粗略な墳丘構築法は、ひとつの时期的な特徴をなすと考えられるが、比較資料に乏しく、今後検討すべき課題である。

「礫積遺構」と仮称した遺構は、礫積より一回り大きい掘り方のような広がり確保され、礫がほぼ小口をそろえて積み上げられた後、礫をおさえる裏込め様の土が込められた、墳裾近くに設けられ

た何らかの施設の痕跡であるが、片側は礫積すれすれまで大きく攪乱により壊されており、どのような施設であるか確定することができない。埋葬施設に関連する施設の一部であるか、「礫槨墓」など別種の施設の一部である可能性がひとまず考えられるが、古墳自体に関連する施設であるとするれば、小口積にした礫を伴う施設であることそのものが、ある時間幅を示唆していると見ることができる。

以上、今回の発掘調査で得られた断片的な資料から考えられることを簡単に記した。元富東古墳のみならず「東富田古墳群」については、周辺の墓群、古墳群の推移を軸に、古墳群に対応する集落跡の推移をも見極めて後に、あらためて位置付けを考え直す必要があるように思われる。

末筆ながら、発掘調査、報告書作成にご協力頂いた様々な方々に心から御礼申し上げる次第である。

引用・参考文献

- 稲村坦元編 1951 『埼玉県史 第一巻 先史原史時代』埼玉県
- 岩澤正作 1926 『児玉郡志資料視察雑記(1)』『上毛及上毛人』第106号、上毛郷土史研究会
- 太田博之・佐藤好司 1991 『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅴ－公卿塚古墳』本庄市埋蔵文化財調査報告第19集、本庄市教育委員会
- ・松本 完他 2003 『宥勝寺裏壇輪窯跡・宥勝寺北裏遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告第26集、本庄市教育委員会
- 恋河内昭彦・松本 完 2008 『七色塚遺跡－B 1 地点－・北堀新田前遺跡－A 1 地点－』本庄市埋蔵文化財調査報告書第7集、本庄市教育委員会
- 小久保徹・柿沼幹夫他 1978 『東谷・前山・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集、埼玉県教育委員会
- 小暮秀夫 1927 『武蔵国児玉郡誌』児玉郡誌編纂所
- 昆 彰生・佐々木幹夫・荒川正夫他 1980 『大久保山Ⅰ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告1、早稲田大学
- 塩野 博 2004 『埼玉の古墳 児玉』さきたま出版会
- 菅谷浩之 1970 「壺形土器を出土した公卿塚古墳について」『埼玉研究』第19号、埼玉県地域研究会
- 本庄市史編集室編 1976 『本庄市史 資料編』本庄市
- 1986 『本庄市史 通史編Ⅰ』本庄市
- 1989 『本庄市史 通史編Ⅱ』本庄市
- 増田逸郎・柿沼幹夫・小久保 徹他 1979 『下田・諏訪』埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書第21集、埼玉県教育委員会
- ・小久保 徹他 1977 『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集、埼玉県教育委員会
- ・坂本和俊他 1986 『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県民部県史編さん室
- 増田一裕 1987 『東富田遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第10集、本庄市教育委員会
- 1989 『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第14集、本庄市教育委員会
- 松本 完・大熊季広他 2009 『浅見山Ⅰ遺跡(Ⅲ次)・久下東遺跡(Ⅲ次) A 1・B 1 地点・北堀久下塚北遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第13集、本庄市教育委員会
- 柳田敏司 1963 「本庄市公卿塚古墳と石製模造品」『埼玉考古』復刊第1号、埼玉考古学会

图 版



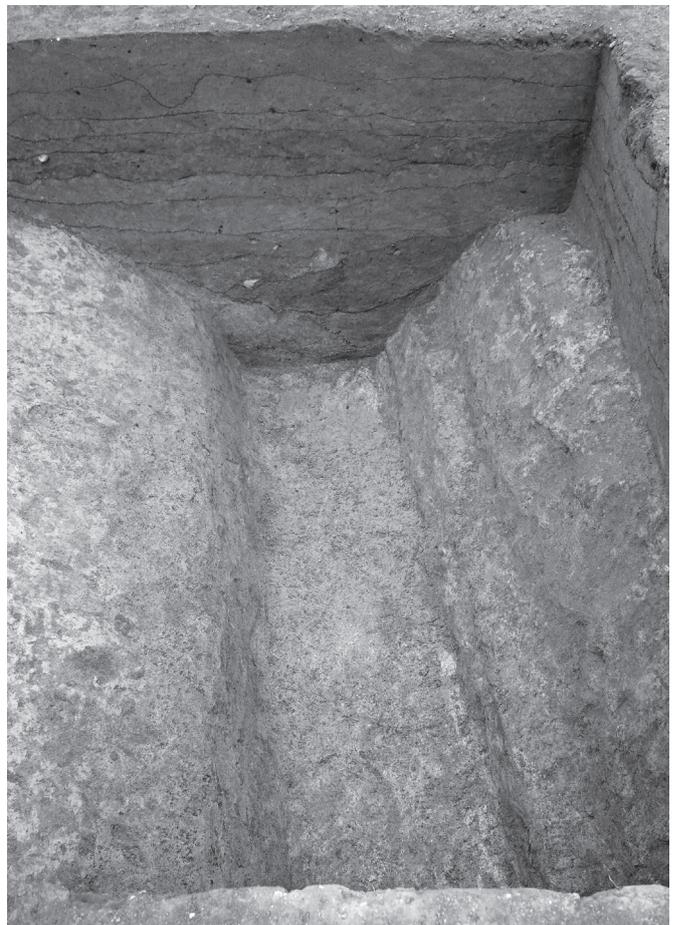
元富東古墳全景(東より。昭和60年頃撮影か)



A地点完掘状態(東より)



1号溝跡(南より)



1号溝跡(北より)



1号土坑(北より)



1号土坑(北西より。粘土層除去前)

図版2 B地点



B地点墳丘検出状態(西より)



B地点全景(北東より)



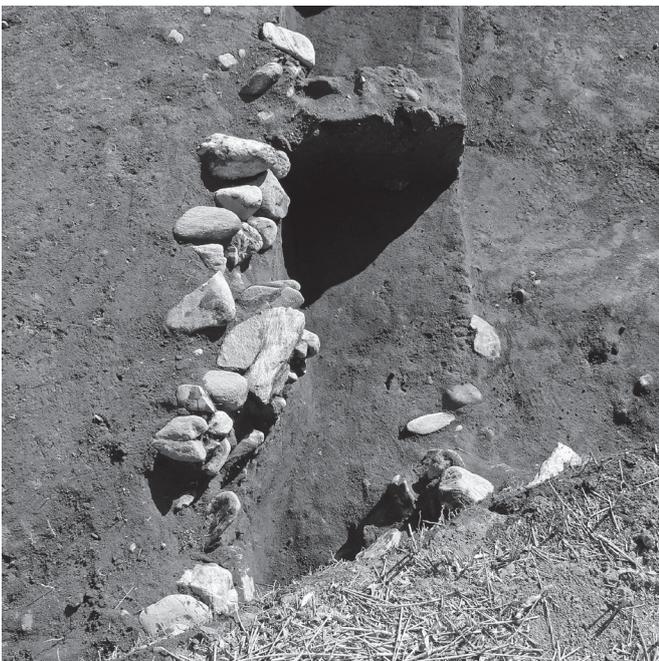
トレンチ17完掘状態(南東より)



トレンチ18完掘状態(南より)



トレンチ20墳丘断面(南より。中央は、トレンチ18)



トレンチ17完掘状態(南東より)



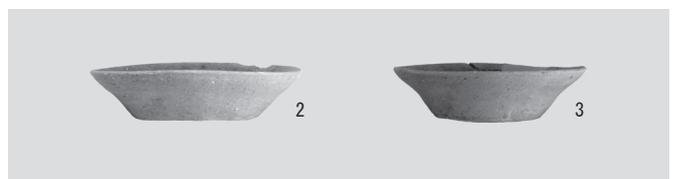
礫積遺構断面(西より)



礫積遺構土層断面(南より)



礫積遺構(南西より。裏込め除去後)



B地点出土遺物

報告書抄録

フリガナ	モトトミヒガシコフン-A・Bチテンノチョウサ-						
書名	元富東古墳-A・B地点の調査-						
副書名							
シリーズ	本庄市埋蔵文化財調査報告書	巻次	第48集				
編著者	松本 完・太田博之						
編集機関	本庄市教育委員会						
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 TEL 0495-25-1185						
発行日	西暦2016年(平成28年) 3月 28日						
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村遺跡	北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	調査面積	調査原因
モトトミヒガシコフン 元富東古墳 A・B地点	ホンジョウシヒガシトミダアザモトトミ 本庄市東富田字元富231 番1、234番	112119 53-121	36° 13' 21"	139° 10' 38"	20151013 ～ 20151030	93 m ²	集合住宅および 駐車場建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
元富東古墳		古墳時代	古墳墳丘、土坑		土師器・埴輪片		
		古墳時代以降	溝跡				
		近世			かわらけ		

本庄市埋蔵文化財調査報告書 第48集

元富東古墳

- A・B地点の調査 -

平成28年 3月24日 印刷

平成28年 3月28日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

電話 0495-25-1185

印刷／山進社印刷株式会社